

【本編】

シュガー・ドロップ（知性を溶かす蜜液の媚薬）

【番外編】

王の絶対服従と静かなる蹂躞

狂気の解体と甘味の置換

蜜月の悪夢―終焉の甘露―

【小話集】

背徳アフタヌーンティー

降り続く雨が崩れかけた外壁を叩く。かつての栄華の欠片もない。差し押さえの赤紙が死神の足跡のように貼られた廊下を、シェリルは泥に汚れたドレスの裾を引きずって歩いていた。

「……お父様、本当なのですか」

書斎の扉を開けた彼女を待っていたのは、震える肩を丸めた父と、影のように寄り添う二人の男だった。一人は軍靴の音を響かせ傲慢なほど背筋を伸ばした黒衣の男。もう一人は闇の中でも発光するような白いコートを纏い、眼鏡の奥で愉しげに瞳を細める男。

「すまない、これしか道が……」

父が差し出したのは羊皮紙の契約書だった。そこにはシェリルの身柄を「研究材料」および「観賞用標本」として、大国の支配者へ無期限に譲渡する旨が記されていた。

「研究……標本……？ 何を仰っているの？」

「言葉通りの意味だよ、お嬢様」

白衣の男——ユリアが、音もなくシェリルの背後に回り込んだ。首筋に冷たい指先が触れる。まるで、解剖する部位を確かめるような、無機質な手つき。

「君という美しい果実が、腐りゆく没落の泥にまみれるのは忍びない。……だから僕たちが、永遠に腐らないように『加工』してあげようと思ってね」

「やめ……離して！」

逃げようとしたシェリルの行く手を、軍靴の主——ギルが塞いだ。彼はシェリルの顎を強引に掴み、逃げ場を奪う。

「騒ぐな。お前はもう、人間ではない。借金を埋めるための『物品』だ。……物品に拒否権があると思うか？」

「……………っ！」

ギルの金の瞳に射抜かれシェリルは声を失った。ユリアが彼女の耳元で、甘く毒を含んだ声

で囁く。

「白磁のような肌、折れてしまいそうな細い腰……何より、この意志の強そうな瞳が、甘い毒で濁っていく様はさぞ美しいでしょうね」

ユリアが歩み寄り、白い手袋を嵌めた手でシェリルの顎を乱暴に掬い上げた。

「……っ、離して……」

「おや、まだ言葉を話せるだけの理性が残っているようだ。今のうちに、その可愛い舌を存分に動かしておくといい。すぐに、吐息を漏らすことしかできなくなるんだから」

「安心するといい。苦しみも、恥じらいも、すべて用意した『菓子』の中に溶かしてやる。

……次に目覚める時、世界で一番幸せな、空っぽの標本になっているはずだ」

ハンカチに染み込んだ嗅いだこともないほど甘い香りが意識を急速に奪っていく。薄れゆく視界の中でシェリルは見た。自分の人生が、名誉が、そして自分という個人の尊厳が。パステ

ルカラーの闇の中へゆつくりと沈んでいく様を。

その部屋は巨大な宝石箱の中身をぶちまけたような、暴力的なまでの華やかさに満ちていた。壁一面を覆うパステルピンクのシルク。床には毛足の長い真っ白な絨毯。空気中には、吐き気がするほど濃厚な薔薇と砂糖の香りが漂っている。シェリルは冷たい床の上に跪かされたまま、己の運命を呪うことさえ忘れて呆然としていた。

ユリアは傍らのワゴンから、小さな、けれどこの世のものとは思えないほど美しい装飾が施されたブリキの缶を取り出した。

彼が蓋を開けると、中には色とりどりのきらきらと輝くドロップが詰まっていた。まるで切り出した宝石をそのまま砂糖でコーティングしたような、あまりにも無邪気な「お菓子」たち。「さあ、シェリル。歓迎のデザートだよ。これは『忘却の雫（レテ・ドロップ）』。……まずは、

このピンクの粒を食べてごらん」

ユリアが指先でつまみ上げたのは可憐な桜色のドロップだった。

「嫌……食べたく、ない……っ」

「拒否権などないと言ったはずだ。ギル、彼女を」

背後にいたギルがシェリルの細い両腕を背後で強引に組み伏せた。鋼のような力に抗う術はなく、シェリルは仰け反るようにして喉を晒す。

「食べなさい。それとも無理やり喉の奥まで指を突っ込まれたいか？」

ギルの冷たい脅しに、シェリルは絶望の中で口を開かされた。

放り込まれたドロップは、舌の上に乗った瞬間、驚くほど濃厚な甘酸っぱさを弾けさせた。

イチゴと薔薇を煮詰めたような目が眩むほどに甘い味。

「……ああ……」

飲み下した直後、シェリルの脳内で何かが「ぷつん」と音を立てて弾けた。

熱い。身体の芯が、内側から発火したように熱を帯びていく。

同時に、頭の中にあつたある「記憶」が、霧が晴れるように急激に薄れていくのを感じた。

（あ……れ……？ 私、誰のことを考えていたんだっけ……？）

かつて故郷で自分を助けると約束してくれた幼馴染の少年。その名前が、顔が、声が、ピンク色の砂糖水の中に溶けて消えていく。

大切だったはずの想いが、ただの「無価値なデータ」として脳から消去されていく感覚。

「ふふ、いい顔だ。初恋の記憶が溶ける味はどうだい？ 甘いだろう？」

ユリアの囁きが、熱くなった鼓膜に直接注ぎ込まれる。

「ひ、あ……あ……っ♡♡」

熱い。熱くてたまらない。

レテ・ドロップの効果は、単なる忘却ではなかった。知性を一段階削るごとに、その余白を強烈な「快樂」で埋め尽くすようだ。

シェリルの肌は桃色に染まり、ドレス越しに触れる自分の腕の感触さえも、耐え難いほどの刺激となって脳を揺さぶる。

「……熱い、です……なにか、おかしい、の……っ」

「おかしくなんてないよ。君が本来の『モノ』としての姿に戻ろうとしているだけさ。ほら、ギル様を見てごらん」

ユリアに促され、シェリルは霞む視界でギルを見上げた。薬の副作用か瞳孔が異常に散大し、世界が白く発光している。その中心に立つギルだけが網膜に焼き付くような鮮明な黒として存在していた。

ギルがシェリルの胸元を、無造作に掴み上げる。

「ユリア。この女を今すぐ『調律』しろ。夜会までには、自分の名前さえ忘れた完璧な砂糖菓子（シュガー・ドロップ）に仕上げるんだ」

「さあ、シェリル。次はもっと美味しいのをあげよう。これは君の『プライド』を溶かす、金の粒だよ」

ユリアの指先が、二粒目のドロップをシェリルの唇に押し当てる。シェリルはもう、それを拒む力さえ失っていた。

「……い、いや……もう、食べたくない……っ」

シェリルは、ピンクのドロップがもたらした熱い混濁の中で必死に首を振った。初恋の記憶を失った脳裏には、パステルカラーの霧が立ち込め足元がふわふわと浮いているような感覚がある。けれど、まだ「自分」が何者であるかという芯は残っていた。

「おや、まだそんなことが言えるんだね。意志の強い女の子は嫌いじゃないけれど、あまり手

間をかけさせないでほしいな」

ユリアが今度は金の包み紙を開いた。現れたのは、磨き上げられた純金のように重厚な輝きを放つ、一粒のドロップだ。

「これは、君の『言葉』を整理するためのものだよ。没落したとはいえ、君は少々、お勉強ができませんでした。……物品に、難しい理屈や、生意気な拒絶は必要ないだろう？」

ユリアがシェリルの頬を指先でなぞる。その指が唇に触れた瞬間、シェリルはガチガチと歯を鳴らして拒もうとした。

「この子は、自分の価値がどこにあるのかまだ理解できていないようです」

「……愚かなことだ」

背後にいたギルが、冷たい吐息と共にシェリルの髪を掴み、力任せに仰け反らせた。

「シェリル。お前の誇りなど、この王宮ではゴミ同然だ。……自ら飲み込め。さもなくば、お

前の喉を焼き切っても流し込んでやる」

黄金の瞳が、至近距離でシェリルを射抜く。その威圧感に、シェリルの喉が恐怖で小さく鳴った。こじ開けられた唇の間に、金のドロップが滑り込む。それは濃厚なキャラメルと、焦がした蜜の味がした。

「……………ふ……………あ……………!？」

熱い。ピンクのドロップが「火」だとしたら、これは重厚な「重り」のようだった。飲み下した瞬間、脳の奥底にある「知識の書庫」が、巨大な炎に包まれるような衝撃が走る。

(あ……………え……………? 私……………なんて……………言おうと……………)

先ほどまで考えていた、抗議の言葉。『不当な拘束です』『権利を侵害しています』――。

難しいけれど自分を支えていた鋭い言葉たちが、ドロドロとした黄金の蜜の中に沈み、意味をなさなくなっていく。単語の綴りが崩れ、文法が溶け、論理的な思考の回路が一つ、また一

つと切斷される。

「……………ああ、あ……………あ……………あ……………」

シェリルは必死に声を上げようとしたが、唇から漏れるのは、かつての令嬢の氣品に満ちた言葉ではなかった。

ただ、喉の奥を震わせるだけの、艶めかしく湿った吐息。

「あんなに生意気だったお口が、もう『あ』と『う』しか思い出せなくなっている！」

ユリアが楽しげに笑い、シェリルの熱い舌を指で弄った。

「感度飽和も始まっているね。……………ねえ、シェリル。今の君を支配しているのは、難しい理屈？ それとも……………この、疼いてたまらない『ナカ』の熱さかな？」

「ひ、あ……………あ、っ……………！♡♡ あづ、い……………あつい、の……………っ♡」

シェリルの脳内から「尊厳」という概念が消え去った。代わりに、全身を駆け巡るのは、ド

レスの布地が肌を撫でるだけで絶頂に導こうとする、暴力的なまでの過敏。

「……いい。だいぶ『空っぽ』に近づいたな」

ギルがシェリルの顎を掴み、瞳孔の開ききったその瞳を覗き込む。

「シェリル。これからお前に、唯一の『言葉』を教えてやる。……それは私の『許可』だ。お前はこれから、私の許可なしには、一滴の快楽さえ得ることは許されない」

シェリルは、自分が何を失ったのかさえ思い出せぬまま目の前の支配者が与えてくれるさるなる「甘い毒」を求めて、震える唇を戦慄させることしかできない。

シェリルはパステルカラーの闇の中で身悶えた。金のドロップを飲み下してから数分。彼女の脳内からは、秩序だった思考を司る語彙の半分が、熱い蜜に溶かされて消え去っていた。

さらに追い打ちをかけるように、ユリアが彼女の瞼をこじ開け、一滴の澄んだ液体を落とすた。

「怖がらなくていいよ。これは君の瞳をもっと美しく開かせるための魔法の滴だ」

ユリアの囁きと共に、シェリルの視界は劇的に変質した。

瞳孔が限界まで散大し周囲の光を過剰に吸い込み始める。窓から差し込む陽光は、暴力的なまでの白光となって網膜を焼き、豪華なはずの調度品も絨毯の模様も、すべてが白い霧の向こう側に掻き消えていく。

眼前で微笑むユリアの端正な顔。そして、その背後で腕を組み冷徹な光を湛えた金の瞳で自分を射抜くギル。二人の姿だけがまるで世界に唯一残された真実であるかのように、シェリルの脳裏に強烈にインプリント（刷り込み）されていく。

「僕たち以外を見る必要はないんだ。君の小さな脳みそは、僕たちの姿と声、そして与えられる『熱』だけを処理していればいい」

ユリアの細い指がシェリルの熱を帯びた首筋を滑り、そのまま衣服の合わせ目へと伸びた。

「さあ、仕上げだ。脳を空っぽにしたら、次は『器』を蜜で満たしてあげよう。準備はよろしいですか？」

ギルが音もなく歩み寄り、シェリルの細い腰を片手で軽々と持ち上げた。

「ああ。……この女のナカを、二度と私なしでは生きられぬほど甘い毒で埋め尽くせ」

シェリルは、冷たい大理石の台の上に仰向けに横たえられた。

視界は白く霞み自分がどこにいるのかさえ定かではない。ただ、肌に触れるギルの大きな手の熱さと、ユリアが用意する「装置」の金属音だけが、恐ろしいほどの解像度で伝わってくる。

「シェリル、脚を開いて。……いい子だ。もう拒む力も残っていないね」

ユリアが手にしたのは、透き通った硝子製のシリンダー。その中には、ドロップよりもさらに濃厚で、粘り気のあるピンク色の液体——「シュガー・ドロップ」が満ちていた。

「ひ、あ……あ……っ！♡♡ な、に……なに、を……っ」

「君を内側から『加工』するんだよ。君の体液をすべてこの蜜に入れ替え、腐ることのない、甘いだけの標本に変えるんだ」

ユリアの指がシェリルの最も秘められた蕾を割り、容赦なく「蜜」の入り口を広げていく。感度飽和を起こしている身体は、指が触れるだけで絶頂を予感して跳ね上がったが、ギルの重い掌が彼女の肩を強く押し付け、自由を奪う。

「……動くな。これから注ぎ込まれるのは、私の『所有印』だと思え」

ギルの宣告と共に、冷たい硝子の先端が、熱りきったシェリルの最奥へと滑り込んだ。

「っ——?!?!? ん、んん——っ!!」

流し込まれたのは、熱を帯びた溶岩のような、それでいて暴力的に甘い「蜜」の奔流だった。内壁のひだの一つひとつを押し広げ一滴の隙間もなくシェリルの空洞を密閉していく。身体
の芯が、内側から強制的に「造り替えられていく」感覚。

ドロドロとした蜜が内壁に吸着し、神経を麻痺させ快楽の閾値を限界まで引き上げていく。

「♡……あ……あ……っ♡、お、なかが……あつ、い……っ。なにか、はいつて……いっぱい、に……っ」

「そうだよ、シェリル。君のナカは今、僕たちが与えた蜜で満杯だ。……でも、まだダメだよ。『許す』まで、それを一滴も漏らしてはいけない」

ユリアはシリンドーを抜くと、すぐさま宝石の付いたクリスタルのプラグで、彼女の出口を固く封じ込めた。

「ひぐっ、あ……あ……あ……っ！！♡♡」

逃げ場を失った蜜が、シェリルの内側で激しく暴れる。

絶頂したい。今すぐ、この熱をすべて吐き出して楽になりたい。

けれど、物理的に封じられた肉体と、ギルという絶対的な存在の「禁止」が、彼女を快楽の

地獄に繋ぎ止める。

「……許可なく果てることは許さん。もし一滴でも蜜を零せば、次はもっと『重い』ものを注ぎ込む。……いいな、シェリル」

ギルの低い声が、白濁した視界の向こうから、シェリルの魂を縛り上げる鎖のように響いた。

「……は、い……♡ぎ、る、さま……。……あ……あ、あ……っ」

シェリルは、もはや自分がかつて何を誇りとしていたのか、思い出せなかった。

瞳に映る二人の主人の顔。ナカを満たす、重く甘い蜜。

大理石の台の上で、シェリルはもはや自分の手足の境界線さえも曖昧な感覚の中にいた。視界は点眼薬の副作用で白く飛び、鼓膜には心臓の鼓動が早鐘のように打ち鳴らされている。

「……さあ、シェリル。君の『器』がどれほど蜜を受け入れられるか、試してみようか」

ユリアの甘い声と共に、シェリルの両脚が左右に大きく割られ、固定具で台に固定された。

無防備に晒された熱い蕾は、点眼薬とドロップの相乗効果によって微かな空気の揺れにさえ絶頂を予感してひくついている。

「ひ、あ……ゆりあ、さま……、なにか……なにか、ください……あつい、の……っ」

「おねだりかな？ いい子だ。でも、僕が与えるのは君を楽にするための『愛』じゃない。君を永遠に甘く閉じ込めるための『蜜（シュガー・ドロップ）』だよ」

ユリアが手にしたのは、先ほどよりも太く、長い硝子管。その中には、ピンク色の粘膜を透過して、妖しく光り輝く濃厚な蜜が充填されていた。

「あ……っ、ん、んんっ!？」

硝子管の先端が、熱りきったシェリルの最奥へと容赦なく潜り込んだ。

感度飽和を起こしている内壁は、異物が侵入する摩擦だけで激しく波打ち、シェリルは背中を大きく反らせて絶叫に近い喘ぎを漏らす。

「しっ……。暴れてはいけないよ。蜜がこぼれたら、ギルに叱られてしまうからね」

ユリアがシリンドアの押し出し棒（プランジャー）をゆっくりと押し下げた。

途端、シェリルの体内へと「暴力的なまでの質量」が流れ込んでくる。

中
略

「さあ、シェリル。仕上げの時間だよ。……最後の一粒、この金のドロップを食べて」

ユリアが差し出したのは、ひときわ大きく、禍々しいほどに輝く一粒だった。

シェリルは、焦点の合わない瞳を揺らし、自ら口を開いた。拒絶という概念は、すでに数時間前のドロップと共に消え去っている。

「……………あ……………心……………きれ、い……………っ」

ドロップが舌の上で溶け出した瞬間、シェリルの視界がぐにやりと歪んだ。脳の奥底で、記憶の辞書が燃え上がるような熱が走る。

「令嬢」「誇り」「自由」「名前」――。それらの言葉を構成していた文字が、一つ、また一つと崩れ落ち、意味を失った記号へと変わっていく。

（……………なまえ……………。……………わたしの、なまえ……………な、んだっけ……………？）

思い出そうとすればするほど、思考の隙間にふかふかの綿菓子が続め込まれていくような、

幸福で空虚な感覚に支配される。

かつて自分が誰であったか。どんな声で笑っていたか。

そんな「重い荷物」が、甘い蜜の中に溶けて消えていくことが、今はただ心地よかった。

「ふふ、いい顔だ。……ねえ、シェリル。君は誰？」

「……………。わたし、は……………。……お、かし……………っ♡……………ぎる、さま、の……………、お、にんぎょ、さん……………っ♡」

その唇からついに「シェリル」という個人の名は失われた。

彼女の語彙は、今や幼児のように断片的で、ひらがな混じりの熱い吐息へと退行していた。

だが、それは幼児退行ではない。知性が薬によって物理的に消去された結果、本能と依存だけが剥き出しになった「機能不全の成人」の姿だった。

「……………よし。完全に壊れたな」

ギルがシェリルの髪を掴み、その空っぽの瞳を覗き込む。

そこには、一国の令嬢としての理知など欠片もなかった。あるのは、瞳孔の開ききった瞳で主人を映し、熱い蜜でパンパンに膨らんだお腹をさすりながら、さらなる薬物をねだる雌の顔だけだ。

「あ♡ぎる、さま……っ♡♡……なかが、あついの。……たりない、の……♡♡」

「足りないだと？ あれほど注ぎ込んだ蜜を、まだ欲しがるのか」

「……ん♡……もっと、あつく……して……っ♡♡」

羞恥心という回路が焼き切れた彼女は、自ら脚を割り、プラグで封じられた「蜜の出口」をギルに晒した。

プラグのクリスタル越しに、内側のピンク色の蜜が、彼女の拍動に合わせて揺れているのが見える。

「……ユリア。次の段階（フェーズ）だ。この女の体液を、一滴残らず媚薬（シュガー・ドロップ）へ置換しろ。……血の代わりに、甘い毒が流れる『生きた薬瓶』に造り替えるんだ」

「御意……さあ、シェリル。もつともつと、甘くしてあげるよ。君の涙も、汗も、吐息も……全部が主人を誘う『蜜』になるまで」

ユリアが取り出したのは、無数の細い管がついた巨大な吸引・灌注装置だった。

シェリルの腕に、腰に、そしてナカへと、新たな管が接続されていく。古い血液が抜かれ、代わりに最高濃度の「蜜」が全身の血管へと送り込まれる。

中
略

ユリアの私的な実験室は、常に微かな薬品の香りと覆い隠すほど濃厚なバニラの芳香に満たされている。

壁一面には、ホルマリンに漬けられた色とりどりの「成果物」が並び、中央には、肢体を固定するための硝子製の寝台が冷たく光っていた。

「さあ、シェリル。今日は君の『味』を、もっと深めてあげようね」

ユリアの囁きは、まるで幼子を寝かしつける母親のように優しい。寝台の上に四肢を広げられ、透明な拘束具で固定されたシェリルは、焦点の合わない瞳をゆつくりと瞬かせた。彼女の腕や足首には、すでに幾本もの細いカニユーレが差し込まれ、そこからは淡い琥珀色の「蜜」が、彼女の体内へと絶え間なく送り込まれている。

「……あ、……あ……。……ゆりあ、さま……。……からだ、が……。あつい、の……。っ」

「それはね、君の血が『蜜』に恋をしているからだよ。……もうすぐ、君の中から不純な赤い

色は消えて、代わりに世界で一番甘いシロップが全身を巡るようになるんだ」

ユリアが手にしたのは、最新型の灌流装置。彼はシェリルの首筋に指を当て、脈動を感じ取る。そこから流れるのは、もはや人間の鼓動ではなく、粘り気のある蜜が導管を押し進む、鈍く重い振動だった。

「……あ、あ、あ、ああ——っ!!」

装置が作動し、シェリルの体内から残った血液が吸い出され、同時に最高濃度の『置換用シユガー・ドロップ』が血管へと圧送される。

全身の神経が、薬物による強烈な「知覚変容」を起こし、シェリルの視界はパステルカラーの火花で埋め尽くされた。

痛みはない。ユリアが与えるドロップは、痛覚という神経回路をすべて「快感」へと繋ぎ変えてしまうからだ。今やシェリルにとって、針を刺されることも管を通されることも、すべて

は主人の「熱」を直接受け取るための甘美な儀式に過ぎなかった。

「ふふ、いい子だ。……見てごらん、君の指先を。……ほら、爪の先までピンク色の蜜が透けて見えているよ」

ユリアが彼女の指を一本ずつ口に含み、甘噛みする。感度飽和を起こしているシェリルの身体は、指先へのわずかな刺激だけで激しく痙攣し、ナカに封じられた蜜がプラグを押し出すほどの勢いで波打った。

「ひ、あ……っ！♡♡♡ んぐっ、……あ、あ、あ、あああ——っ！！♡♡♡」

「……おや、もう我慢できないのかな。……でも、まだ君の『脳』を仕上げていないからね。

……せっかくの蜜が、君の汚い悲鳴で濁ってしまったら台無しだ」

ユリアは傍らのワゴンから、一瓶の「青い液体」を取り出した。それは、シェリルの脳内の言語中枢と自我の残滓を物理的に「砂糖漬け」にするための特殊な調剤だ。

「さあ、シェリル。これを飲み込んで。……君の頭の中を、ずっと、ふかふかの綿菓子にしてあげようね」

ユリアが彼女の口をこじ開け、液体を注ぎ込む。喉を通る瞬間の、冷たく、それでいて脳を焼くような感覚が脳髓に直接、甘い麻痺が染み込んでいく。

自分がかつて令嬢であったこと。没落したこと。父の顔。……それらの重苦しい「人間の記憶」が、青い液体の海に沈み、溶けていく。

後に残るのは、ユリアが囁く「君はお菓子なんだよ」という刷り込みだけ。